常陸大宮済生会病院

小児科部長 伊東 岳峰 先生

症状

治療

子どものインフルエンザ

毎年冬になると話題になるインフルエンザ。 流行期や子どもがかかってしまった時に、慌 てずに対応しましょう。



救急車以外

突然の高熱・頭痛・関節痛・筋肉痛などで発症。その後、鼻汁や咳を伴います。

多くは4~5日で熱が下がりますが、二峰性の発熱(熱が下がって落ち着いたと思ったら再 発熱)を示すこともあります。

異常行動などのリスクがあるので、発症後2日間は十分な観察が必要(一人きりにさせない) です。意味不明の行動などがあれば、早めに医療機関へご相談ください。

肺炎・中耳炎・熱性けいれん・脳症・筋炎など。 合併症

インフルエンザ後の細菌感染(二次感染) ⇒ 抗生物質が必要。

経過・症状・流行などから総合的に診断します。 インフルエンザ迅速キットも有用ですが、ある程度ウイルスが増殖しないと正確に判定でき 診断 ません。また、苦痛を伴う検査なので、発熱してすぐの検査は勧めていません。「発熱後12~48 時間」のタイミングで検査すると良いです。

①抗インフルエンザ薬

内服薬(タミフル:1歳~)、吸入薬(リレンザ:5歳~、イナビル:吸入可能かつ1歳~)、 点滴薬(ラピアクタ)など。漢方(麻黄湯)が有効な場合もあります。すでに増えたウイルス は自分の防衛能力で抑え込むしかないため、これがうまくいくかで解熱時期が違います。ただし、 これらの薬はウイルスを直接攻撃するのではなく、「これ以上増えないようにする」ものです。 ⇒つまりウイルスが増え過ぎると効果が下がるため、発症後2日以内に薬を使用することが重要 です。

②対症療法 (解熱鎮痛薬、去痰薬など)

使用可能な解熱鎮痛薬は、アセトアミノフェン(カロナール、アンヒバ坐剤など)のみで、 その他の解熱鎮痛薬は、脳症などのリスクがあるため使いません。

③安静、水分補給

こまめな水分摂取が重要。無理に食べさせる必要はありませんが、水・お茶だけでは、糖や イオンの補給が不十分なので、経口イオン水がおすすめです。

ワクチンが基本。有効率は高くないが、軽症化が期待できます。ただし、周りのワクチン接 種やマスク使用、手洗い・うがいの励行、部屋の乾燥予防、流行期の人混みの回避、規則正し 予 防 い生活、十分な栄養も含めて予防であることをご認識ください。

<平成28年度 常陸大宮済生会病院 救急患者受入状況>

